

## 書評 市川裕著『ユダヤ教の精神構造』 東京大学出版会、2004年

勝又 悦子

近年、日本においても、ユダヤ教、ユダヤ人問題に関心が高まってきていることは非常に喜ばしい現象である。ナチスによるホロコーストの大悲劇は繰り返してはならない歴史として自覚され、これを主題とする映像、文学作品は日本でも広く受け入れられており、そのような悲劇をもたらした陰のヨーロッパ史とも言えるユダヤ人迫害史、近現代のヨーロッパ各地でのユダヤ人の状況についての研究は日本人によっても盛んである。同時に、その迫害されていたはずのユダヤ人が抑圧者に回っているとの印象を与える現在のイスラエル・パレスティナ紛争の関心も非常に高く、新聞紙上に関連記事を見ない日はない。中東紛争については、多くの研究書、概説書、実際にそこに暮らす人々の声のリポート、情報が巷にはあふれている。特に、9.11テロ以降、アメリカを筆頭にする欧米先進国とアラブ諸国家の対立は、キリスト教とイスラム教の対立であるかのようにも組み替えられ、必ずリンクされるイスラエルのユダヤ教も意識されるようになった。他方、思想史分野では、S.フロイト、J.デリダ、E.レヴィナスなど、ユダヤ系の思想家は枚挙の暇がないが、日本でも、彼らの思想についての研究も盛んで、その著作も多数紹介されている。

評者も機会あって日本におけるユダヤ関係の文献表を作成したことがある。昨今のユダヤ関係の出版物の量に驚いたが、出来上がった文献表をみながら、何か欠けているような気がしてならなかった。それは、ユダヤ人差別、紛争、思想と、多面多様な、いわばユダヤ教から表出してきた現象への関心は非常に高く、論考も多数発表されているのに、これらの現象の核ともなるべき、ユダヤ教そのものへの研究が欠落しているのではないかという思いである。差別されてきたユダヤ人を支えてきたユダヤ教、パレスティナと問題を起こしているイスラエル国家の基盤たるユダヤ教、ユダヤ人思想家たちの意識的であれ無意識的であれ、彼らの思考の基盤となってきたユダヤ教、このユダヤ教の何たるかを、真っ向から扱った論考というものは、日本では、そして日本人によっては、まだ、殆んどなされていないということに気づいたのである。確かに、新約聖書学の分野で、イエスや福音書時代のキリスト教の歴史的背景を知る手段として、同時代のラビ・ユダヤ教への関心が高まっている。そして、

このラビ・ユダヤ教は、国家、国土をなくしてなおかつ、現代まで生き延びてきたユダヤ教の基盤を作り上げたものであるが、しかし、この分野の論考は、翻訳ものがほとんどであり、まだまだ翻訳学問、まさに紹介の域を出ていないのが現実である。

このような状況の中、本書『ユダヤ教の精神構造』が世に出た。著者、市川氏は日本のユダヤ教研究のパイオニアとして、ユダヤ教の何たるかを様々な側面から、長きにわたって論考を重ねられてきた。本著は、氏の研究史上発表されてきた論文の集大成であり、さらに書き下ろしを加えられたものである。こうしてまとめられた本書は、日本人による初めての、ユダヤ教、ユダヤ思想の紹介、概説にとどまらず、その真髄を真っ向から論考するものであり、現状の日本でのユダヤ教、ユダヤ人研究での欠落部分を埋める、貴重な書であるといつてよいだろう。ここにまず本書の大きな意義があると思われる。

本書の目的は、ユダヤ教に特有の思惟を生み出す基本的な信仰の特徴とそこからどういふ文化的営み、社会形成が為されてきたかという実態的な側面をあわせて理解することであると著者は言う。ユダヤ教史の歴史の変遷を追ったり、ユダヤ教の個々の現象を実証的に分析したり、体系的に論じることは目的ではない。特定の時代を専門的に詳細に叙述するものでもない。従って、ユダヤ教のイロハを知るための概説書として、もしくは特定のトピックについての知識を得たいという目的には直接的にはかなわないかもしれない。しかし、本書は、著者の関心に基づいて、多彩な時代、分野、地域でのユダヤ教の根幹にかかわる事柄についての思惟とそこから生まれてきた現象を取り上げ、その根底にあるユダヤ教の精神構造なるものを、個々の事例から析出しようとしている。これは遠大な企てである。この射程の広さと果敢な志が本書の第二の特徴であり意義であろう。

そもそも昨今の宗教学や歴史文献学では、ある宗教、社会、文化現象に通底する何かを析出するという企てを放棄しているのではないか。多様性に目が向かう反動で、一貫する何かがあるという仮定自体が疑問視されている。この傾向は、実は、ユダヤ学内部のラビ・ユダヤ教研究において顕著である。かつて総体としてのラビ・ユダヤ教なるものが前提とされていた。しかし、時代的にも地域的にも広範囲にわたるラビ・ユダヤ教世界は決して一枚岩ではないことが徐々に明らかにされ——このこと自体は真実の一面を表しており研究史上の成果であるのだが——個々人の研究対象は時代、地域、分野を制約せざるを得なくなり、細分化の一途をたどっている。実証性を求めるためか、研究者の専門性も細分化が進む。あるいは、安全を期するために自分の研究範囲を狭く設定せざるをえないのか。

このように細分化されていく研究状況に対して、本書では、ヘブライ語聖書あり、タルムード期のユダヤ教あり、中世ユダヤ神秘思想あり、現代のアメリカでのユダヤ研究事情についての論考あり、さらに、キリスト教、仏教との比較も随所でなされているように、時代、地域、

さらには宗教の枠を縦横無尽に飛び越えて果敢な論考が試みられている。そこには氏の実存にかかわる研究者としての使命と、日本人が日本語で日本人にユダヤ教という異文化を伝える場合、結局は日本の文化自体を知らねばならないという、著者の海外生活体験に基づく認識が関わっている。近視眼的にならざるをえない研究者は、本書を読み進めるうちに、視線をふと上にあげて、個々の現象の背後にあるかもしれない大いなるもの——それは実は、宗教、文化を超えて共通するものかもしれない——の存在を意識することになるかもしれない。そして、研究者としての個々人の使命をもう一度問いただす契機になるのではないだろうか。自分は、何のために何を明らかにしたかったのであろうか、と。

本書は三部構成をとっている。第一部「法の宗教の成立」では現在のユダヤ教の基盤が形成されたラビ・ユダヤ教体制の成立をテーマとし、ユダヤ教がキリスト教に対していかに自己の正統性を主張したか、聖書の理念と思想がユダヤ教においていかに制度化されたか、法的自治社会を支えるタルムードを制度知としてとらえ、そこから生まれたユダヤ人社会制度の構造を問う。第二部「トーラー精神発現の諸相」では、国土を失ったユダヤ共同体を支えるトーラーとその解釈のあり方を、ラビたちの聖書解釈(ミドラシュ)において、祈禱において、そして神秘主義において、対象を変えながら幅広く論じられる。第三部「近代との相剋」では、トーラーとその解釈の産物である口伝トーラーに依拠するユダヤ教のシステムが、一方で近代合理的思想、一方で神秘主義との対峙によって解体していく様を扱っている。

各論から導き出されたユダヤ教の思惟と現象は、モザイクのように相互補完しあって、ユダヤ教なるものを訴えているであろう。断章的に引用される多くの聖書解釈を通してユダヤ教的精神の発露を見ることができよう。多数の図版、写真も視覚的にユダヤ教の世界を語っている。また、イスラエル滞在中に、シナゴークでの朝の礼拝に通り続けたという、著者のユダヤ教体験に裏付けられた論考は、日本人としての視点からのユダヤ教礼拝の実際を知る上で貴重である。評者の経験からすると、ユダヤ教のシナゴークでの礼拝は、個々人が各自のペースで祈りを進めてゆき、トーラー開帳では歓喜で盛り上がり、トーラー朗読では読み方をめぐって議論が飛び交うなど、騒然たる雰囲気、日本人がキリスト教的な礼拝から思い描くいわゆる「厳粛」な礼拝とはおよそ程遠い。これは、最も端的な異文化体験であった。そのようなシナゴークの雰囲気が本書、特に第六章「罪と赦し」からも伺えるのではないかと思う。シナゴークに足を踏み込むには一抹の勇気が必要であったであろうし、また早朝の礼拝に毎朝通うことは大変であったろうと想像される。そのような実体験に基づいてこそ、シナゴークでの礼拝の雰囲気を活字にしながらかつて伝えることができているのではないだろうか。

さて、この三部構成の書に通底するキーノートは何であろうか。第一にそれは、法と「自由」

への著者の強い一貫した関心ではないだろうか。本書には、自由、自治、自発的意志、自我、などの「自」にまつわる用語が頻出しているように、ユダヤ教の「自」なる部分、自律的なものへ、著者の究極的な関心があるように思われる。ユダヤ教は、膨大な法、戒律を生み出した戒律宗教というイメージがある。戒律にとらわれ、「聖書の字句に拘泥する民」といった批判的ユダヤ教徒像も今なお健在である。確かに、ユダヤ教にはたくさんの戒律がある。食物規定、日々の祈りについても、様々な規定がある。そして膨大な法規集、ミシュナは重要なユダヤ教の文献であり、これについての議論がタルムードとしてまとめられ、さらに注釈文学を生んだ。このような戒律群は、自由の対極にあるように思われる。しかしながら、もしも、本当にユダヤ教が戒律にとらわれる不自由な、硬直した宗教であったなら、国土を失って以来2000年もの間を生き延びることはできなかったであろう。制約となりかねない法と自由、この両極の緊張の狭間でユダヤ教は育まれ、その創造力を培われたのであり、そして生き延びることができたのではないだろうか。戒律宗教でありながら、現在まで生き延びているのはなぜか。そこにユダヤ教の自由なる精神構造があり、それが著者を惹きつけて止まないのではないかと。

現代社会において、日本社会において、私たちは、「自由」を享受できることは当たり前のことのように思っている。しかし私の自由は他者の自由を侵すことも多々ある。それが国家レベルになれば、国際紛争である。私たちの自由な時代においても、その自由とは絶えず制約を受けるものである。ならば、制約と自由の緊張関係に源を持つユダヤ教の精神は、自己と他者の自由を折り合わせていかなければならない現代に生きる私たちの指針ともなるのではないだろうか。本書は、現代における自由の問題を考える材料を与えてくれるであろう。

ユダヤ教の自由の源となったのは、実は、その対極にあると思われる法の中にある。さらに遡れば、その法を生み出した口伝トーラー、その元となる聖書解釈にあると思われるが、本書においても口伝トーラー、聖書解釈への強い関心が随所で見られる。これは第二のキーノートであろう。そもそも著者は、「モーシェ・ラベイヌ」(われらの師、モーセ)という称号に触発されている。ヘブライ語聖書では預言者であるはずのモーセは、ラビ・ユダヤ教以降、現在に至るまでも、われらの師と呼ばれる。それは何を意味するか。著者は、モーセに匹敵する賢者となるのがユダヤ教における人間の理想であり、その理想から生み出される慣習、制度、共同体、すべての総体がユダヤ教の精神構造の発露であると考えている。

更に、評者には、この称号には、上述の自由と法の二極の緊張の中に育まれたユダヤ教の精神そのものが体現しているように思われる。著者も依拠しているミドラシュでは(本書49頁)、すべての口伝トーラーは、後代のラビの議論をも含めてモーセに顕現されたと言われる。だから、後代の人間がどのような解釈をすることも、何を生み出すかも、その正当性はモーセに顕現されたということで最初から保証されている。人間には解釈の自由が与えられているのである。にもかかわらず、ユダヤ人は、多数の法を引き出してきた。そこには、我らの師、モーセに

恥じないあり方を導き出そうという自覚が働いているのではないか。人間の解釈活動に対する絶大なる自信と、われらの師、モーセの道から外れないあり方を求めようという自制、この狭間にユダヤ教の自由なる精神の源があるように思われる。それゆえ、ユダヤ教の戒律は、決して自律性を失わせるものではなかったのではないだろうか。こうしてみると、「モーシェ・ラベイヌ」という称号は、確かに著者の主張どおりユダヤ教を知る重要な鍵であろう。

モーセが主導し、様々な苦難を経てトーラーが与えられる出エジプト記について思索を巡らす第二部第三章「自由と戒律」は本書の中でも中心を占める論考であろう。何ゆえに、モーセに率いられるユダヤの民は、トーラーを授与されるまでに、砂漠を彷徨する必要があったのか、数々の試みに遭わされねばならなかったのか、なぜわざわざ砂漠でトーラーが与えられたのか、といった出エジプト記を前にする者が抱く疑問が追究される。また第二部では、他に、ユダヤ教における偶像崇拜の問題、聖典の中でも位置づけの難しい雅歌がどのように解釈されたか、また悔い改めの週間に唱えられる祈りにおける父祖の徳、神秘主義思想での障がいを持つ者のたとえの有する意味を問う論考がされる。ユダヤ教の聖書解釈が体系的に論じられたわけではないが、必要に応じて随所で聖書解釈のしくみ、特徴、その展開を学ぶことができる。そして徐々に、著者の聖書解釈をとらえる視点が、広がっていく様子が伺える。ミドラシュから、神秘主義のたとえ話までユダヤ教の聖書解釈を幅広く味わえる書はあまりない。

第三のキーノートとして、G.ショーレムが提示したユダヤ教史のモデルが、著者を強く捉えているように思われる。ショーレムの明晰なるユダヤ教神秘主義の解明と、ユダヤ思想史上への位置づけは、今後も有効であろう。ショーレムは、そもそもユダヤ教に伝統的規範的側面と革新的神秘的側面が共存しているところに、新たな発展への動力源を見る。この枠組みは他の宗教史にも応用できると思われるし、また、ある文明、文化の発展、ひいては自分が生きる時代における伝統や過去の時代を考える際にも意義のある視座ではないかと思われる。すでにショーレムのユダヤ教神秘主義についての著作のいくつかは邦訳されているが、ショーレムの方法論自体は日本ではまだ論考されてはいない。本書を通して、ショーレムの遠大なる視点が日本でも認識されることを願う。

本書の論点は、著者の私的な関心からスタートしており、著者の論理思考に従って展開し完結しているために、ある種、充足した世界であることも事実である。そうであるかもしれないし、そうでないかもしれない、という問いが脳裏をよぎるのもいたし方ないだろう。著者は、最初から実証的研究を目指すものではないとしているが、本書で指摘され論考された事柄が資料に基づいていかに立証できるか、興味は尽きない。それは個々の領域の研究者の役割であろうが、それを考えるとき、本書の網羅する領域、時代の広さと著者の視点の広さ、問いかけの鋭さに唸らざるを得ないのである。

## 執筆者紹介 (掲載順)

森 孝 一	(同志社大学神学部教授)
綱島(三宅) 郁子	(同志社大学嘱託講師)
モスタファ・モハッゲグダーマード	(イラン科学アカデミーイスラーム学部部長)
富田 健 次	(同志社大学神学部教授)
アダ・タガー・コヘン	(同志社大学神学部助教授)
高 橋 徹	(同志社大学大学院アメリカ研究科博士後期課程)
勝又 悦子	(同志社大学嘱託講師)

## 編集後記

学術誌『一神教学際研究』(JISMOR)の創刊号をお届けします。

一神教学際研究センターでは、2003年の創設以来、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三大一神教を中心に、多神教をも含めた諸宗教を幅広く視野に入れながら、宗教と政治・経済、宗教と文明、宗教と社会、宗教と文化、宗教と人間について、分析と議論を重ねてきました。この議論はまた、つねに国際的であり、学際的であるように心がけてきました。本センターのこのような試みは、世界に類を見ないものであり、大いに意義ある活動であると私たちは考えています。

私たちの活動や議論はインターネットなどを通して世界に発信されていますが、ここに、学術誌というかたちで、世界に向けて問題提起できることを嬉しく思います。本センターにおける成果や私たちの関心を広く知っていただくことを通じて、一神教をめぐる議論が国際的に、かつ学際的に、より一層深まるものと期待します。

毎号、テーマを設けることにしています。今回は、「一神教における対立と対話」というテーマで、4本の論文を掲載することができました。ご意見、

ご批評などお寄せいただければ幸いです。このテーマは私たちの活動を包括するような大きなテーマですので、本誌のテーマとして、いずれまた取り上げることができれば、と考えます。

世界に発信するという使命を担う本誌は、日本語、英語、アラビア語の3言語で発行されます。翻訳と訳の確認の作業は思いのほか困難で、スタッフや関係者にご苦勞をおかけしましたし、発刊までの時間も予想以上にかかりました。しかし、3言語での発行によって、世界中の多くの方々が本センターの活動に関心を寄せられ、私たちの議論に加わってくだされば、その労は報いられると信じます。

次号も皆様からの投稿を募ります。テーマは未定です。次号のテーマ等は、後日お知らせいたします。テーマにかかわらず一神教に関する一般の論文も受けつけますし、研究ノート、書評、研究動向なども募集しますので、奮ってご応募くださるようお願い申し上げます。

2005年2月  
編集委員(代表) 石川 立